

—ネパール便り—

## カトマンズのある一日

深津紀代美

午前七時 モソモソと寝袋から這い出す。窓の外はまだ一面の霧。この霧は午後になればカラリと晴れ、日ざしが暑いほどになる。九月にネパールのカトマンズに来て以来、一度も雨にはお目にかからない。今日は隣りのSと二人、食事当番。眠い目をこすりつつ、石油コンロにやかんをかけ、さて何をつくろうかと棚を物色する。まずはモーニング・テイとてあついミルク紅茶を入れ、残り三人を起しに行く。ネパールでは一日に二食しか食べないがそのかわり朝起きぬけ、お昼、午後四時頃とよく紅茶を飲む。町や村のバザールには必ず茶店があって、舌をやけどするほどあついお茶をガラスのコップに入れて飲ませる。

朝食は九時から九時半。これをネパール人はランチと呼び、ランチを食べてから役所や学校に出かけるので、十時に始業のベルが鳴るわけである。食器を土間にじかに置いて食べるのがネパール式であるが、私達はダンボールの箱の上にビニールを敷いて、食卓代りとした。食器はお皿とコップが各自一つずつあるのみ。それでも工夫したいで結構楽しい食事ができる。ラッシュ・アワーの混んだ電車、うるさい電話や車の音から解放されて、食欲はモリモリ。カトマンズに来て昏太ってしまった。この国には「若い女の手は針金のように細い方が良い」なんて変な考えが、はびこっていないので助かる。

食事後は自由行動。ラマ寺や学校へ、又役所へとそれぞれの計画により散って行く。私達の住んでいた家はカトマンズ郊外にあり、バスで十五分ほどかかって、町の中心部に出る。バスでは男と女は並んで腰かけず、私の隣の席があいているのに、男同志三人無理して坐っているのには、笑ってしまう。大抵前の方に女性専用の席がある。ヒマラヤに近づくほど女性の地位が高くなるといわれるが、ここカトマンズはヒンドゥ教の影響か、女性は家の中に閉じこもり、夫や家族に奉仕する。妻は每晚夫の足に額をつけて、神としてあがめるといふ。もちろん中には外国で大学教育を受け、政府の役人となって活躍している女性もいるが――

この国には大学が二十三ほどあるが、そのうちで最も古いトウリ、チャンドラ・カレッジの地理学教室を訪れた。主任教授はオックスフォードに留学したマラ氏で、いつしここにごした気さくな人柄だ。私がネパールの地理学について尋ねると、彼は大きな地図を持ってきて、日本の地名の正しい読み方を聞かれた。教科書はトレワサーのもの等、お茶大で買ったものが多い

ぶんあり、懐しかった。女子学生は地理だけで七～八名おり、本を小脇にかかえ、胸にスカーフをなびかせて、さっそうと歩いていた。今日は丁度試験反対の学生ストライキで、教授が忙しかったので、女子学生のヒメラと話し合う。一般には男女交際など考えられないこの国であるが、巡検などピクニックのようで楽しいという。いすこも変らぬ学生生活に、私は遠くお茶大で過ごした日々や先生、友達顔を思い出した。

1964年9月より1965年1月  
までネパール滞在  
インド・タイを経て2月帰国

## 永田悦子さんを偲んで

静岡県磐田市田町一五〇一

永田善太郎  
美 寿

春たけなわの候となりました。

皆様方におかれましては生氣溢れる春にふさわしく御活躍のこととお察しいたします。

さて私ども悦子の遺稿遺品などを整理するにつけ、長かった闘病生活を思い出しその間における皆様方のひとかたならぬ御厚情に対し深い感謝の念が湧いてくるのを覚えます。

皆様方の御厚意によって悦子がまた私どもがいかにか励まされ、元気づいたか、その一つ一つかはっきりと思い出されてまいります。

輸血が進むにつれ、食血で青ざめていた悦子の頬にほうっと赤みがさしみるみる生氣を取り戻してゆくを見るとき、私どもはあらためて血の尊さを知り、その貴重な血液を悦子のために下さった皆様方に心から感謝したものでした。

また見舞に來て下さった皆様方がお帰りになった後で、悦子が何となく生き生きとしているのを見るとき、ともしれば病との闘いに挫けそうになる悦子を励まして下さった皆様方に深く感謝したものでした。

悦子が遺した日記を見ましても皆様方の御厚意と励ましに対する感謝の言